

横穴式石室の平面企画についてⅡ

—— 畿内における主要横穴式石室の検討 ——

岡 野 慶 隆

1. はじめに

横穴式石室構築の際に平面企画が想定されることは、これまで多くの研究者により指摘されてきた^①。筆者も、兵庫県西宮・宝塚市の仁川流域の2基の横穴式石室や宝塚市長尾山丘陵の横穴式石室の平面形を検討したが、玄室幅を基準長とし、その倍数値を玄室長及び羨道長にあてる倍数型企画法ともいべき企画法の存在を確認することができた^②。

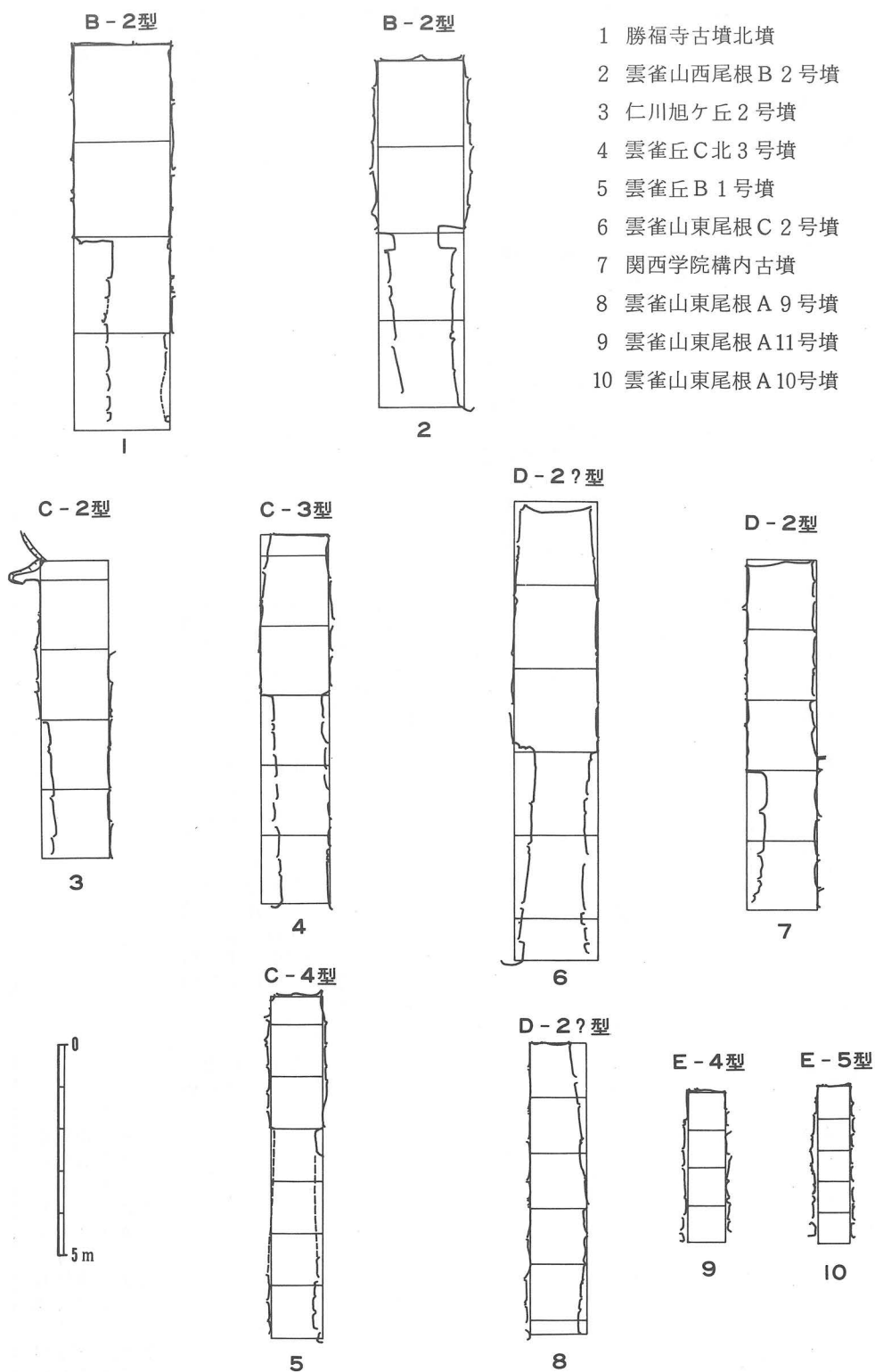
ところで、この企画法は、長尾山丘陵のほとんどの横穴式石室で採用されていることが明らかになったが、他地域についての検討は畿内での若干の類例をあげるにとどまり、今後の課題として残してきた。ここでは、この倍数型企画法が他地域でも存在するものなのか、当面畿内の主要横穴式石室を対象として検討を行ってみたい。また、この企画法が存在するならば、そのあり方や長尾山丘陵にみられる企画法との関連についても考えてみることにしたい。

2. 長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画

畿内の主要横穴式石室を検討するに先立ち、まず前回みた長尾山丘陵における平面企画についてふりかえてみたい。

前回まず注目したのは、玄室の平面形であるが、その形状は長さとの比で決定されるという考え方から、玄室長を幅で割った数値を求めた。この結果、その数値が2倍未満のものをA型(2基)、ほぼ2倍のものをB型(5基)、2倍から3倍までの間のものをC型(4基)、ほぼ3倍のものをD型(7基)、無袖式で全長が倍数値となるものをE型(4基)とした。このうち倍数値となるものは、B・D・E型であるが、有袖式のB・D型では羨道長についても玄室幅の倍数となるものが多く、B型では羨道長の明らかなものはすべて2倍(B-2型)、D型では2・3倍(D-2・3型)のものがそれぞれ存在する。また、玄室長が倍数値とならないC型でも、羨道長が3・4倍(C-3・4型)となるものが各1例存在し、これらも含めて玄室幅を基準長としてその倍数値を玄室長、羨道長にあてる倍数型企画法としてとらえた^③。(第1図・第1表)

また、これらの企画法の時期についてみると、B型は6世紀前半、C・D型は6世紀後半に出現し、ともに6世紀末から7世紀初頭頃に終っており、7世紀前半には無袖式のE型のみとなる。この企画法の前後関係については、羨道長のとり方もあわせて考えると、最も古い勝福寺古墳北墳のB-2型を祖型として、玄室・羨道長の倍数値を増したC-3・4型、D-2・3型が出現したものと考えられる。さらに、各企画法の基準長についてみると、その長さはB-C・D-Eの順になっており、B型からC・D型への企画法の派生は石室の狭長化を求めた結果としてとらえることができた^④。



第1図 長尾山丘陵周辺横穴式石室平面企画

第1表 長尾山丘陵における玄室企画法と基準長の関係

[] 内は仁川流域の古墳

企画法 基準長 (m)	A	B	C	D	E
2.50			中山寺白鳥塚		
2.32 2.25	雲雀丘C北 4号墳	勝福寺北墳 (B-2)			
2.15 1.93		中筋山手 1号墳 中筋山手 4号墳 雲雀山西尾根 B2号墳 (B-2) 雲雀丘C南 1号墳 (B-2)	雲雀山東尾根 C1号墳	雲雀山東尾根 C2号墳 (D-2?)	
1.70 1.66	中筋山手東 2号墳		雲雀丘C北 3号墳 (C-3) 〔仁川旭ヶ丘〕 2号墳 (C-2)	雲雀丘C北 1号墳 (D'-2) 〔関西学院〕 構内古墳 (D-2)	
1.40 1.25			雲雀丘B 1号墳 (C-4)	中筋山手東 1号墳 中筋山手東 3号墳 (D-3) 雲雀山東尾根 A9号墳 (D-2?) 雲雀山東尾根 C3号墳	
1.10				雲雀丘C南 2号墳	
0.98 0.70					雲雀山東尾根 A10号墳 (E-5) 雲雀山東尾根 A11号墳 (E-4) 雲雀山東尾根 A14号墳 (E-5) 雲雀山東尾根 A15号墳 (E-4)

ところで、このような平面企画法の存在については、横穴式石室構築にあたった技術者の介在が考えられる。おそらくその技術者は、あらかじめ平面企画を用意しており、実際の石室構築にあたっては、基準長を決定することより玄室・羨道長を求めたのではなかろうか。このように、倍数型企画法は細かな数値を扱わずに石室を構築できる企画法で、実際には基準長にあたる物差状のものを使用することにより、容易に平面形を決定できたものと思われる。長尾山丘陵における多数の横穴式石室の構築は、この企画法をとおして行われたと考えてよく、その簡易な企画法の採用は、横穴式石室墳の築造増加にともなう石室構築技術者の需要の増大に関連するものと考えられる。

3. 畿内における主要横穴式石室の検討

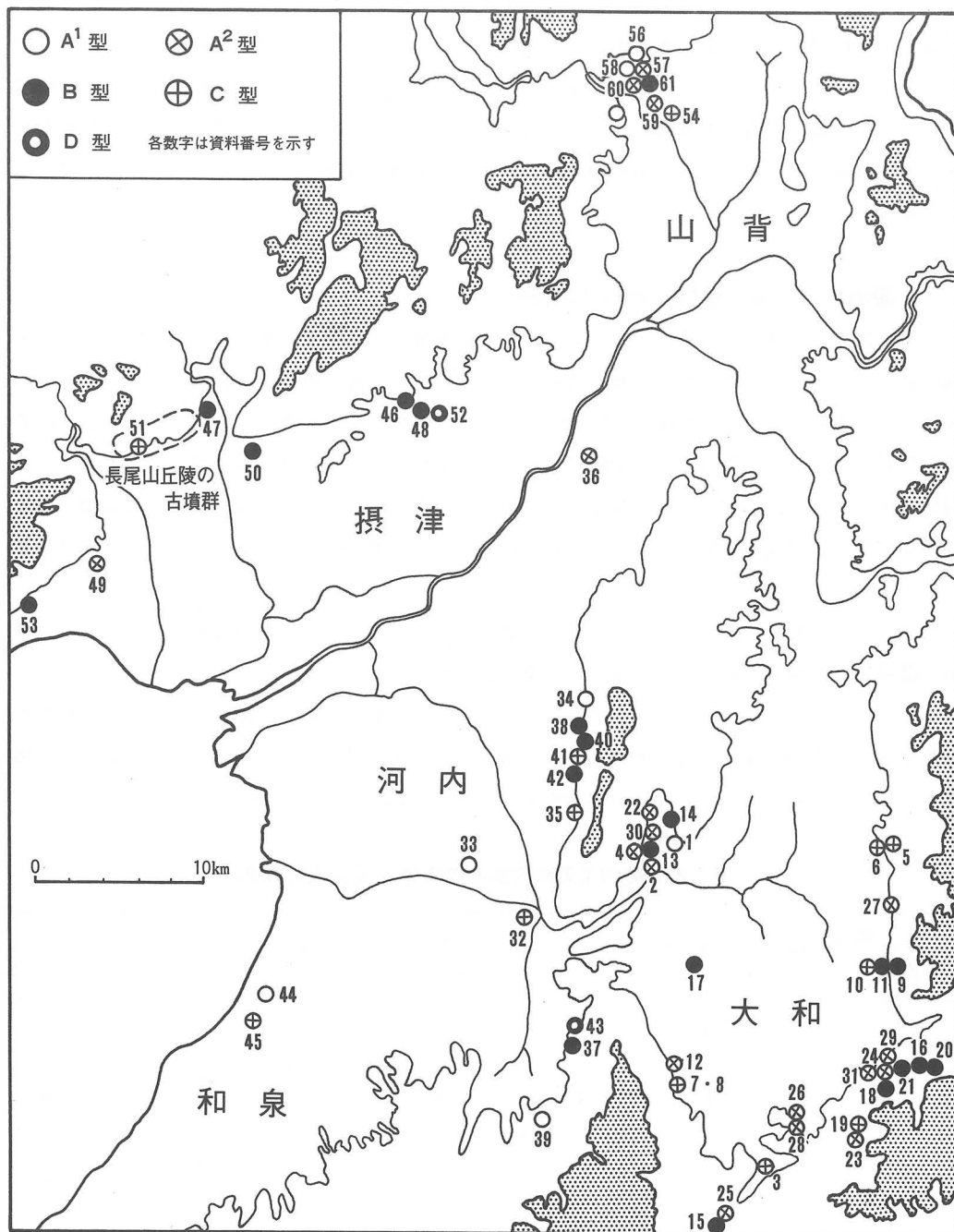
ここで扱う主要横穴式石室とは、大型の横穴式石室墳で、明確な基準はないが、いちおう石室規模については、玄室幅が2～3m、墳丘については、前方後円墳か20～30m以上の円。方墳をもつものを選んだ。また、存在状態については、独立墳か数基で古墳群を形成するもので、群集墳内でも規模の大きいものや初期の横穴式石室も含めた。本来ならば、群集墳の石室も含めて検討すべきであるが、かなり複雑になるものと思われるため、ここではまず各地域の首長墳と考えられる大型の横穴式石室墳を対象とし、畿内における首長層の横穴式石室受容状況より検討していくことにしたい。

このような基準で、畿内における主要横穴式石室のうち平面形の明らかなものを選ぶと、いちおう61基の石室をあげることができる。（第2図・第4表）

これらの横穴式石室について、まず前回と同じ方法で玄室平面形の分類を行うと、玄室長を玄室幅で割った数値が1.0～1.8のものをA型（26基）、1.9～2.1のものをB型（20基）、2.2～2.8のものをC型（13基）、2.9～3.1のものをD型（2基）に分けることができる^⑤。

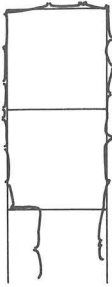
第2表 畿内主要横穴式石室玄室平面企画分類表

地域 企画法	摂	津	和	泉	山	背	河	内	大	和	計
A ¹	0		1		3		3		1		8
A ²	1		0		3		1		1	3	18
B	5		0		1		4		1	0	20
C	1		1		1		3		7		13
D	1		0		0		1		0		2
計	8		2		8		12		3	1	61



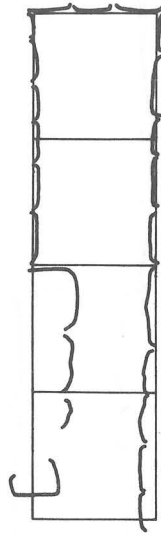
第2図 畿内主要横穴式石室分布図

B型



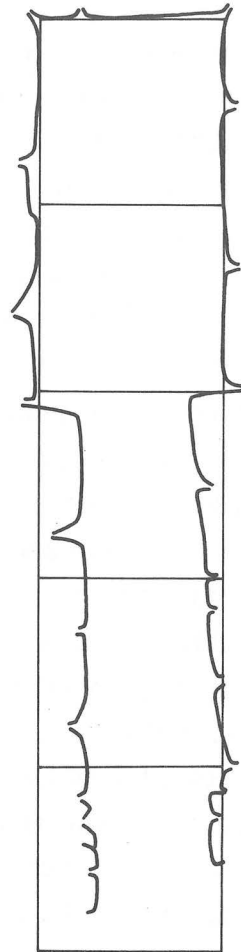
資料9 珠城山1号墳

B-2型



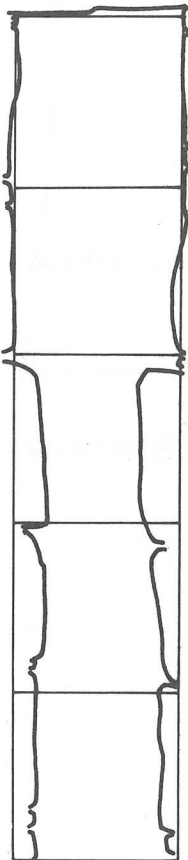
資料11 珠城山3号墳
前方部石室

B-3型



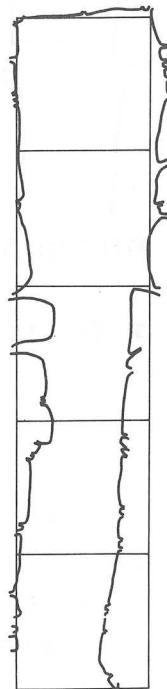
資料16 天王山古墳

B-3型



資料13 鳥土塚古墳

B-3型



資料14 三里古墳

0 5m

第3図 大和における倍数型企画法横穴式石室 - 1

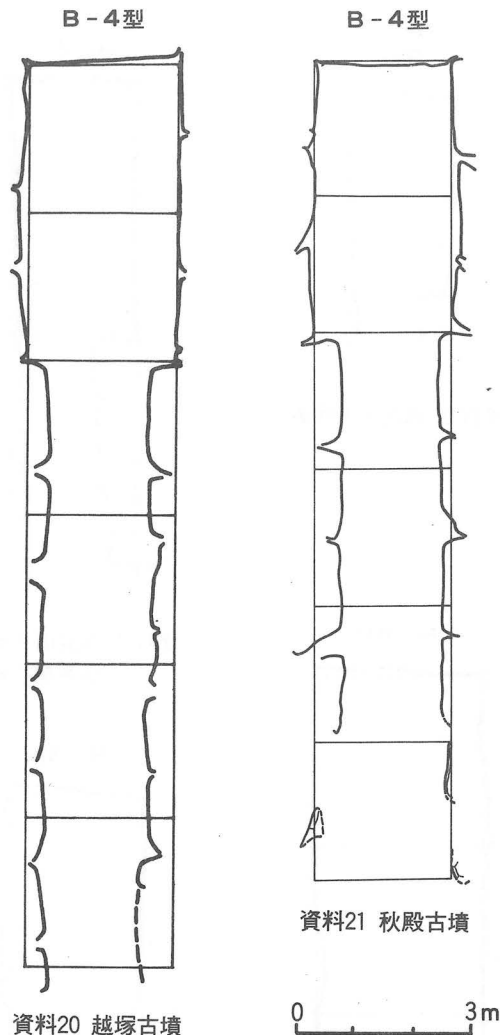
のうち、明らかに倍数型企画法をとるものはB・D型であるが、D型は2基と少なくB型が圧倒的に多い。また、長尾山丘陵では羨道長が基準長の倍数値をとることから倍数型企画法に入れたC型については、羨道長が倍数値にならないものが多いため、倍数型企画法からは除外した。なお、C型では数値の幅を2.0～2.8と長くとしたが、実際には2.2～2.5の間に集中している。また、明らかに倍数型企画法ではないA型は、25基と多いが、数値が1.0～1.5で方形に近いA¹型と数値が1.6～1.8のやや長いA²型とに分けられる。

このように、畿内の主要横穴式石室では、倍数型企画法としてB・D型が存在し、その基数もB型が20基と最も多いが、倍数型企画法でないA²・C型も決して少なくないことがわかる。また、地域的にみると、B型は大和で最も多いが、他の企画法との比率では摂津が最も多くなる。これに対して、和泉ではB型はなく、山背では1基だけ存在するなど、かなりの地域差をうかがうことができる。

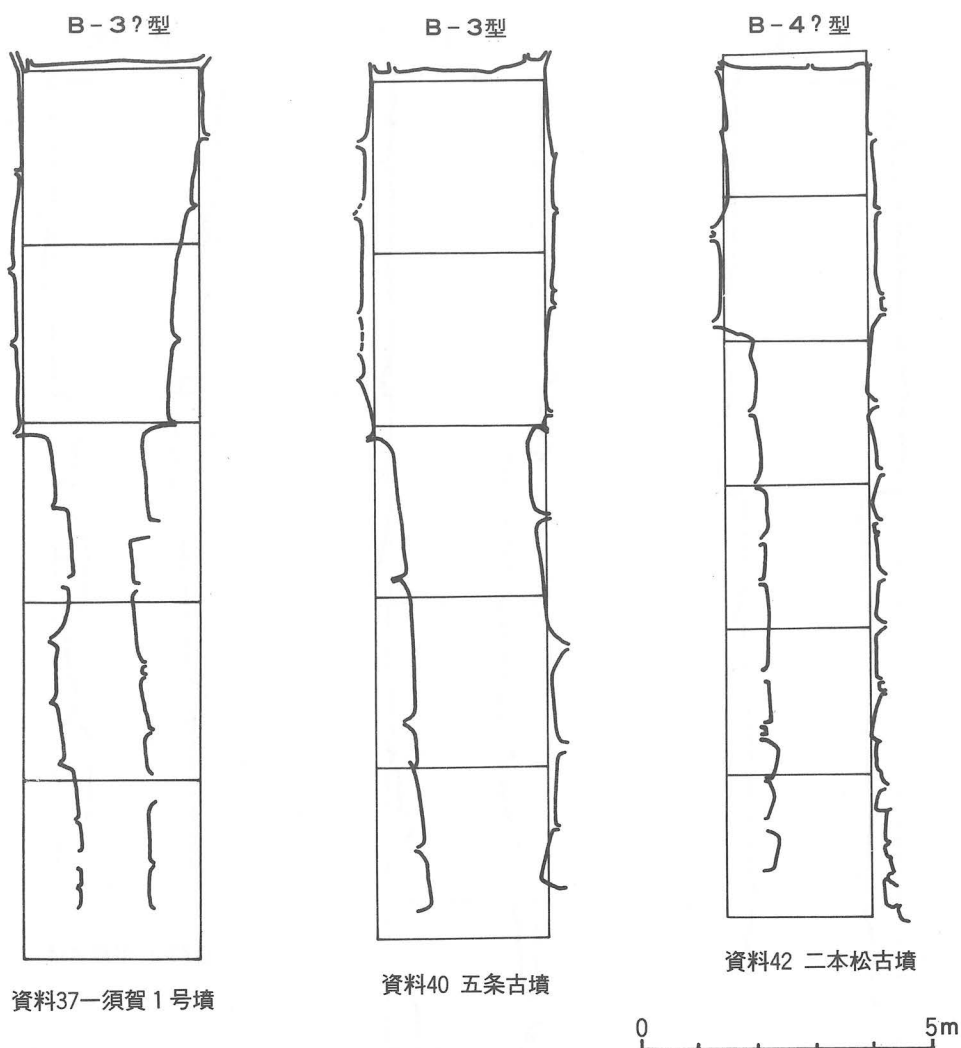
ところで、このような平面企画法の分類比較は、横穴式石室の構築期間である150～200年間の累積結果によるもので、さらに時期的な検討より、次のような各地域ごとの特色ある変遷をみることができる。

大和（第3・4図）

まず、大和についてみると、倍数型企画法であるB型は6世紀中頃から7世紀前半にかけての時期に集中するとともに、この時期には他の企画法がほとんどみられない傾向がみとめられる。これらのB型企画法の石室は、大半は両袖式で、いわゆる巨石墳が多い。また、羨道長に注目すれば、長尾山丘陵でもみられたB-2型（珠城山3号墳前方部石室—資料11）以外にも、羨道長を長くする鳥土塚古墳（資料13）、天王山古墳（資料16）等のB-3型や越塚古墳（資料20）、秋殿古墳（資料21）等のB-4型が存在し、なかでもB-3型の多さが目につく。この分類については、さらに時期的にみると、B-2型が6世紀中頃から後半にかけての頃で最も古く、次いでB-3型は6世紀後半から7世紀初頭、B-4型は7世紀前半となり、時期が下るととも羨道



第4図 大和における倍数型企画法横穴式石室-2



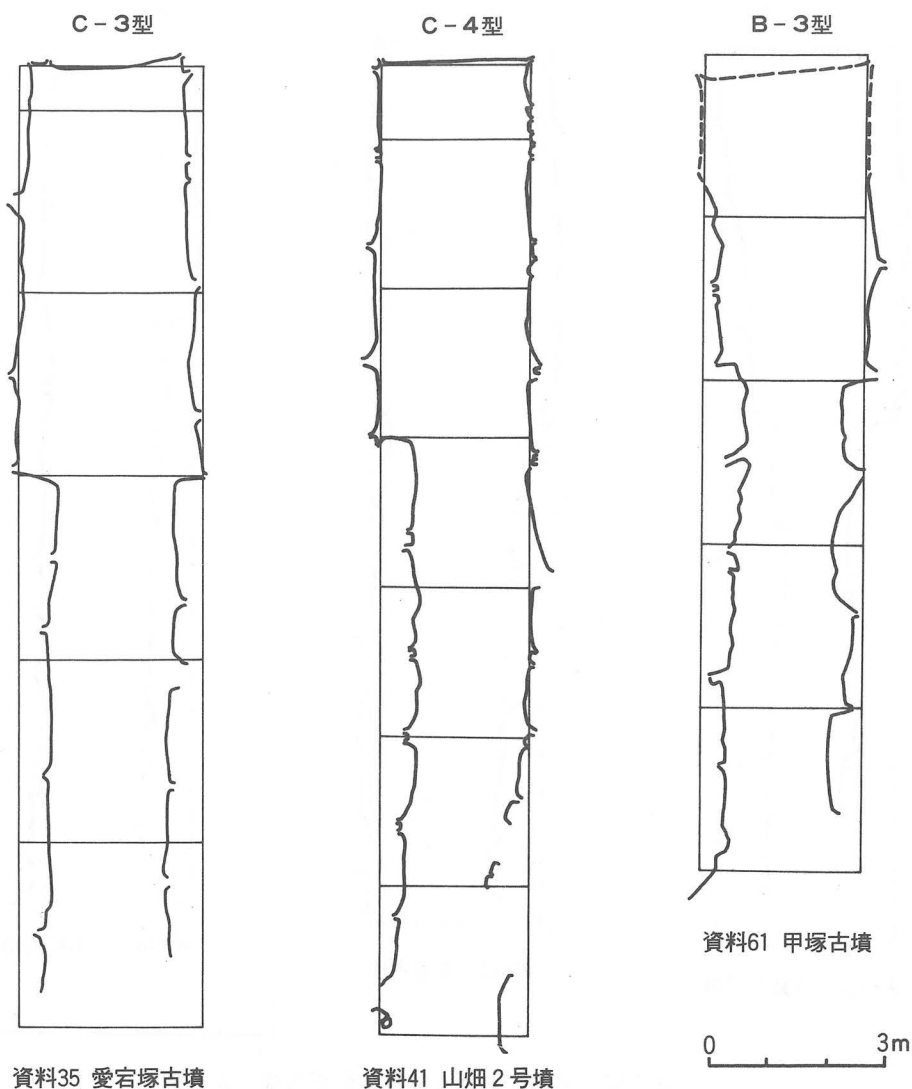
第5図 河内における倍数型企画法横穴式石室

長を長くとる傾向がみられる。

一方、これに対して6世紀初頭から前半にかけての頃の横穴式石室導入期のものでは、椿井宮山古墳（資料1）等方形に近い平面形をもつA¹・A²型以外に、市尾墓山古墳（資料3）、石上大塚古墳（資料5）等のように玄室長の長いC型が多くみられる。このC型の石室は、玄室長・幅の比率が2.2～2.4にはほぼ限られ、石室形態は片袖式がほとんどで、墳丘はすべて前方後円墳である^⑥。

また、7世紀前半のある時期よりB型の石室は減少傾向になり、以後A²型が主流を占める。これらの石室は、岩屋山古墳（資料28）等の切石積の石室を含むいわゆる終末期古墳で、玄室長・幅の比率はほぼ1.7、1.8に限られている^⑦。

このように、大和では倍数型企画法であるB型企画法が、6世紀後半から7世紀前半にかけて

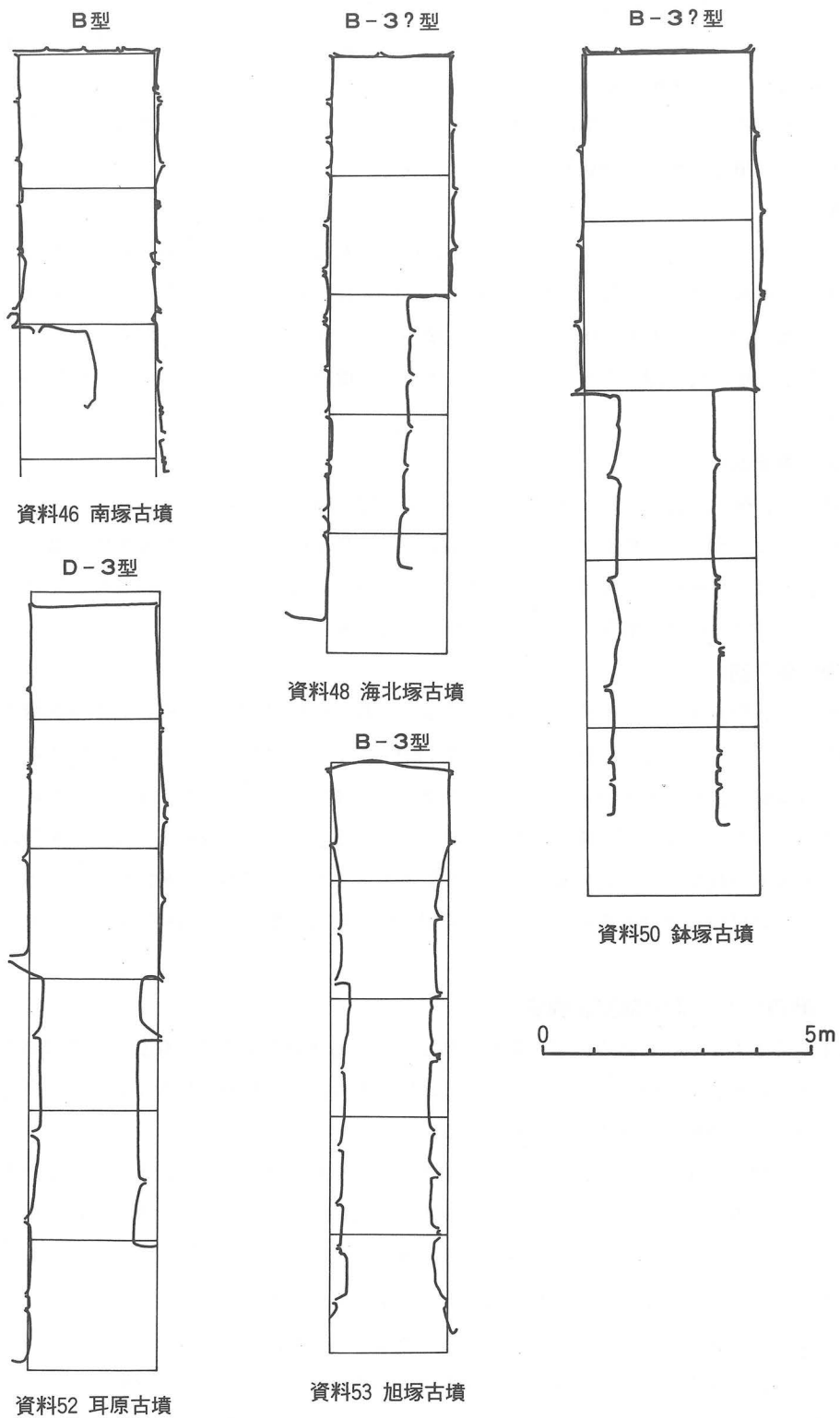


第6図 河内・山背における倍数型企画法横穴式石室

主要古墳の主流を占めていたことが明らかになったが、全体には玄室長の長いC型からB型、A²型へと、時期とともに玄室長が短くなる傾向がみられる。

河内（第5・6図）

河内では、倍数型企画法のものはB型が4基、D型が1基存在するが、大和と同じく6世紀中頃から7世紀前半にかけての時期に集中する。このうちB型では、東大阪市五条古墳はB-3型（資料40）、同市二本松古墳（資料42）はB-4型の可能性が強く、時期は五条古墳が6世紀末頃、二本松古墳は7世紀初頭か前半頃と考えられる。またC型は、河内では最大級の横穴式石室となる八尾市愛宕塚古墳（資料35）と東大阪市山畑2号墳（資料41）があげられるが、羨道長のとり方からすれば、愛宕塚古墳はC-3型、山畑2号墳はC-4型となる。したがって両石室は、



第7図 摂津における倍数型企画法横穴式石室

C型でも倍数型企画法に関連するものとしてとらえられる^⑧。

一方、倍数型企画法をとらないものとしては、5世紀中頃と考えられている藤井寺市藤の森古墳（資料32）^⑨や6世紀初頭から前半にかけての頃の東大阪市芝山古墳（資料34）、大阪市長原七ノ坪古墳（資料33）などの初期の横穴式石室があげられるが、藤の森古墳はC型、芝山古墳、長原七ノ坪古墳は方形に近いA¹型である。

和泉

和泉には大型の横穴式石室はほとんどなく、首長墳的なものとしては堺市塔塚古墳（資料44）、高石市富木車塚古墳（資料45）があげられるが、いずれも倍数型企画法ではない。塔塚古墳は、藤井寺市藤の森古墳とともに横穴式石室では畿内最古の5世紀中頃の年代が考えられているものであるが、方形に近いA¹型である。また、富木車塚古墳は6世紀前半のもので、C型の狭長な石室である。

山背（第6図）

山背では、横穴式石室をもつ前方後円墳や大型円墳が嵯峨野に集中する傾向がみられる（資料54～61）。このうち、倍数型企画法をとるものは、7世紀前半と考えられる甲塚古墳（B-3型）だけで、他は6世紀前半の天塚古墳がC型であるほか、6世紀前半から後半にかけての丸山古墳、御堂ヶ池1号墳、蛇塚古墳等のA¹・A²型が目立っている。

摂津（第7図）

摂津は、B型企画法の占める割合が高い地域で、6世紀初頭から前半頃の茨木市南塚古墳（B型、資料46）、川西市勝福寺古墳北墳（B-2型、資料47）、6世紀中頃の茨木市海北塚古墳（B-3?型、資料48）、6世紀末頃の池田市鉢塚古墳（B-3?型、資料50）、7世紀前半の芦屋市旭塚古墳（B-3型、資料53）等各時期のものがみられる。また、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる茨木市耳原古墳（資料52）はD-3型である。なお、倍数型企画法でないものでは、A²型の西宮市具足塚古墳（資料49）、C型の宝塚市中山寺白鳥塚古墳（資料51）等がある。

4. 畿内における倍数型企画法

以上みてきたように、畿内では倍数型企画法としてB・D型企画法の存在が確認できた。なかでも、B型企画法はその主流を占め、分布は大和を中心に畿内各地に及んでおり、時期的には6世紀中頃より7世紀前半までの間に集中している。

しかし、畿内全体をみれば、B型企画法が大半を占めるわけではなく、他の企画法が多くとられているのも事実で、全体としてはかなり複雑な地域色がみとめられる。たとえば、従来より古式の横穴式石室とされる方形に近いA¹型は、大和、河内では6世紀初頭から前半にかけての頃にみられるが、山背でA²型とともに6世紀後半でも盛んに構築されている。また、大和では玄室長の長いC型が6世紀前半に多く、玄室長の短いA²型が7世紀代に集中している。

このように、畿内における横穴式石室の玄室平面形はかなりの地域差があり、かつて白石太郎氏が畿内の横穴式石室編年の基準としてあげられた「玄室幅指数」・「羨道幅指数」^⑩のうち、「玄室幅指数」は畿内全体では適用できないといえよう。このことは、今回行った玄室平面形分

類作業も同様で、倍数型企画法以外の企画法が解明されたわけではなく、単に玄室長・幅の比率をもとに分類したにすぎない。^⑪

では、このように他の企画法と混在するなかで、倍数型企画法はどのような位置を占めるのであろうか。以下、検討を行ってみたい。

まず、年代的にみると、倍数型企画法は6世紀初頭から7世紀前半にかけて採用されるが、B型がほとんどで、D型はその末期にわずかにみられるだけである。B型の初源は、まず摂津において、6世紀初頭から前半頃南塚古墳、勝福寺古墳北墳が出現する。これらはいずれも右片袖式で、勝福寺古墳北墳の場合はB-2型企画法をとっている。この時期、畿内の他地域ではA¹・C型が構築されているが、摂津に現れたB型企画法の石室も初期横穴式石室の一タイプとしてとらえることができる。

B型企画法が他の企画法に対して圧倒的に多くなるのは、畿内において古墳築造量が増加する6世紀中頃以降で、分布の中心は大和となる。大和では、6世紀中頃から7世紀初頭頃にかけて勝福寺古墳北墳と同じB-2型のほかB-3型が構築されるが、後出と考えられるB-3型は特に多く、それらは両袖式の巨石墳として定型化する傾向がうかがわれる。また、7世紀前半頃には、羨道長を長くとする傾向がみられ、B-3型の発展型としてB-4型が出現している。^⑫

一方、他地域でも6世紀中頃から7世紀前半にかけてB型企画法をとるものがみられる。それは、河内の一須賀1号墳（B-3?型）、五条古墳（B-3型）、二本松古墳（B-4型）、摂津の海北塚古墳（B-3?型）、鉢塚古墳（B-3?型）、旭塚古墳（B-3型）、山背の甲塚古墳（B-3型）等であるが、大半が両袖式であることやB-3型をとるものが多いことにより、大和の影響下に出現したと考えてよいであろう。

ところで、6世紀末から7世紀前半頃には河内の葉室石塚古墳、摂津の耳原古墳等のD型企画法が現れる。これらは、大和にはみられないことや、少数であることより、B型企画法の発展型として摂津、河内で独自に出現した可能性が考えられる。一方、C型企画法でも羨道長が基準長の倍数となるものは3例あるが、6世紀末から7世紀初頭頃の河内山畑2号墳については、長尾山丘陵のものと同じく、その地域でB型企画法より派生した可能性が強い。^⑬

以上のように、B型企画法は6世紀中頃から7世紀前半頃には大和が中心となり、河内、摂津、山背では大和の影響下に採用されたと考えることができる。ところで、その中心となる大和のB型企画法の出現については、摂津の影響によるものか、独自に出現したものかは必ずしも明確ではない。しかし、かりに摂津のものと関連性はあるにしても、6世紀中頃以降のB型企画法の増加は大和が中心であり、摂津においても6世紀中頃以降のB型企画法の採用は、大和の影響下に行われたとみるべきであろう。

では、前回検討を行った長尾山丘陵の横穴式石室の場合はどうであろうか。その点については、前述したように、6世紀前半に出現した勝福寺古墳北墳のB-2型が祖型となり、以後B型が継承されるとともにB型より派生したC・D・E型が現れると解釈した。しかし、ここでみてきたように、勝福寺古墳北墳は畿内の倍数型企画法の石室でも南塚古墳とともに最古のものになることや、6世紀中頃以降のB型企画法の中心が大和になること、長尾山丘陵内でも勝福寺古墳北墳

第3表 畿内主要横穴式石室編年表

年代	地域	摂津	和泉	山背	河内	大和
450			塔塚 (A ¹) ↓ ↓ ↓ ?		藤の森 (C) ↓ ↓ ↓ ?	
500						
550		南塚 (B) 勝福寺北墳 (B-2)	富木車塚(C)	天塚 (C) 丸山 (A ¹)	長原七ノ坪 (A ¹) 芝山 (A ¹) 愛宕塚 (C-3) 白雉塚 (A ²) 一須賀 1 号墳 (B-3?)	椿井宮山 (A ¹) 市尾墓山 (C) 石上大塚 (C) ウワナリ塚 (C) 大和二塚 (C-3) 珠城山 1 号墳 (B) 珠城山 3 号墳前方部 (B-2) 烏土塚 (B-3) 三里 (B-3) 天王山 (B-3) 牧野 (B-3)
600		海北塚 (B-3?) 具足塚 (A ²) 鉢塚 (B-3?) 中山寺白鳥塚 (C)		御堂ヶ池 1 号墳 (A ¹) 入道塚 (A ²) 衣笠山 1 号墳 (A ¹) 蛇塚 (A ²) 狐塚 (A ²)	松本塚 (B) 金山 (A ¹) 五条 (B-3)	
650		耳原 (D-3) 旭塚 (B-3)		甲塚 (B-3)	山畑 2 号墳 (C-4) 二本松 (B-4?) 葉室石塚 (D-3?)	谷首 (B-3) 越塚 (B-4) 秋殿 (B-4) 石舞台 (C) 都塚 (A ²) 文殊院東 (A ²) 小谷 (A ²) 峯塚 (A ²) 岩屋山 (A ²) 文殊院西 (A ²)

は他の群集墳とは離れて東端部に位置すること等からすれば、長尾山丘陵における6世紀中頃以降のB型企画法は大和の影響により採用された可能性が強いのではなかろうか。また、C・D・E型については、B型からの派生とは考えられるものの、大和の主要古墳にはほとんどみられないことからすれば、当地域内か摂津、河内を含む範囲内で独自に生み出された企画法としてとらえられるのではなかろうか。

なお、今回の検討では主要古墳のみ対象とし、群集墳は扱わなかったが、長尾山丘陵のように倍数型企画法を多く採用した群集墳例としては、天理市石上・豊田古墳群⁽¹⁴⁾、桜井市外鎌山北麓古墳群⁽¹⁵⁾、太子・河南町一須賀古墳群⁽¹⁶⁾、東大阪市山畑古墳群⁽¹⁷⁾、高槻市塚脇古墳群⁽¹⁸⁾、京都市御堂ヶ池古墳群⁽¹⁹⁾等をあげることができる。これらの群集墳は、倍数型企画法が大半を占めるものや、A¹・A²型と混在するもの等さまざまで、今後検討すべき問題点が多く残されている。

5. まとめ

以上のように、畿内における主要横穴式石室の平面企画では、倍数型企画法のなかでもB型企画法の占める位置は大きいものである。このB型企画法は、摂津において出現し、その後大和を中心に採用されるようになるが、大和では6世紀中頃から7世紀前半の主要古墳の大半がこの企画法を採用するとともに、他地域にも影響を与えるなど、一つの時期を画するべき企画法であった。

すでに述べたように、横穴式石室構築にあたっては専門技術者の存在が想定されるが、ここでみたような倍数型企画法やその他の企画法については、被葬者そのものよりもまずそれにあった技術者に対応させて考えるべきであろう。このような視点からすれば、6世紀初頭から前半頃の初期横穴式石室がA・B・C型企画法の混在であったのに対して、6世紀中頃以降大和を中心に数多くの石室でB型企画法が採用されることは、平面企画法を同じくする大きな技術者の集団が生まれたと考えてよいのではなかろうか。また、その集団の出現については、大和政権による編成が直接の要因になったものと思われ、その背景としては大和政権と大和内部や他地域の首長層との造墓行為を伴う密接な関係が考えられるのではなかろうか。

このように同一企画法で構築された石室に関しては、すでに白石太一郎氏により、大和の7世紀前半代にみられる岩屋山式横穴式石室の公葬的性格が指摘されている⁽²⁰⁾。ここでみられた大和を中心としたB型企画法は、壁面構築では岩屋山式石室ほどの厳密性はないにしても、すでにこの頃より大和政権による大和及び畿内の首長層支配機構の整備が進行しつつあったことを示すものではなかろうか。

ただし、大和では圧倒的多数を占めたB型企画法も、地域によってはほとんどみられなかったり、他の企画法と混在する等、他系統の技術者集団の存在も想定される。また、B型企画法でも多種の壁面構築法がみられることから、技術者集団が何系統かに分かれる可能性もある等問題も多く、今後群集墳の横穴式石室も含めて検討していきたいと考えている。

<註>

- ① 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（吉川弘文館 1966年）

岡本一士「古墳構築規矩論—その1 横穴式石室」（『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第8冊 1974）

柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開—平面図形と尺度について—」（『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編 1975）

宮川徭「前方後円墳築造企画の「基準尺度」について」（『橿原考古学研究所論集』第4 1979）

富田好久「畿内における横穴式古墳の企画性」（『舟ヶ崎正孝先生退官記念畿内地域史論集 1981）

- ② 岡野慶隆「横穴式石室の平面形について」（『関西学院考古』第4号 1978）

岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について—長尾山丘陵の横穴式石室を中心として—」（『関西学院考古』第6号 1980）

- ③ B・C・D型企画法のうち、羨道長が玄室幅の倍数となるものについては、今回新たにその倍数値をとって「B-2、C-2~4、D-2・3」等の分類を行った。また、無袖式のE型でもその倍数値より「E-4・5」の分類も可能であるが、石室規模が小さなものが多いことより、偶然に倍数となる危険性も考えられる。

- ④ 尺度については、もし使用されていたならば、まず基準長を何尺分かにあてたと考えられる。この点について第1表をみると、1.25~1.40m、1.66~1.70m、1.93~2.15、2.25~2.32mの4グループに分けることができ、これが4~7尺にあたるすると、1尺32~35cmの尺度を考えることができる。

- ⑤ 計測値及び図面については、各報告書及び文献によった。ただし、明らかに誤りと思われるものは、図上スケールにより補正した。また、倍数値については、玄室では ± 0.1 、羨道では明確でないものが多いことより ± 0.2 の範囲内のものもそれぞれ含めた。なお、玄室幅は前・後幅の最大値をとった。

前回の長尾山丘陵での検討では、大半は原図によったが、今回は各報告書の図と記載の数値によったため、資料の不正確さ及び不統一性はまぬがれなく、尺度の使用等の厳密な検討は困難である。

- ⑥ これらのC型企画法の石室については、羨道長が短いことや、時期的にみて、長尾山丘陵のC型とは別のものと考えたい。ただし、大和二塚古墳後円部・前方部の石室だけは羨道長が長くC-3型となり、その位置付けは問題である。

- ⑦ この時期のA²型は、岩屋山古墳などの切石積石室だけでなく、ツボリ山古墳、都塚古墳、文殊院東古墳、水泥塚古墳など自然石積の石室も含まれる。

- ⑧ ただし、愛宕塚古墳については時期的に古く、大和二塚古墳の2石室とともに位置付けは問題である。

- ⑨ 藤井寺市藤の森古墳は、後にあげる堺市塔塚古墳とともに畿内最古の横穴式石室で、5世紀

中頃のものとされているが、時期的にみてこれらに次ぐ石室と隔っている点は再検討の余地があるものと思われる。

- ⑩ 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考－河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」（『古代学研究』第42・43合併号 1966）
- ⑪ この点からすれば、倍数型企画法以外のものでは、同一企画法としたなかでも別系統の企画法が混在する可能性が考えられる。たとえば、大和の7世紀代のA²型はそれ以前のA²型とまったく異なった企画法であった可能性が強い。
- ⑫ 限定された小地域を対象としていないため明確ではないが、長尾山丘陵でみられたように基準長が年代とともに短くなる傾向はみられず、最大規模のものは基準長3m前後を保っているようである。
- ⑬ ただし、大和二塚古墳の2石室や河内の愛宕塚古墳の場合は、いずれもC-3型となるが、時期的にB型企画法の普及開始時かそれ以前にあたることより、単にB型企画法の発展型とすることはできない。
- ⑭ 堀田啓一・泉森皎・河上邦彦『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ－天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第20集 1975）
同『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ－天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第27集 1976）
- ⑮ 前園実知雄・関川尚功ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊 1978）
- ⑯ 藤沢一夫・堀江門也ほか『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』（大阪府教育委員会 1969）
同『河南町東山弥生集落発掘調査概報』（大阪府教育委員会 1970）
- ⑰ 藤井正直・都出比呂志『枚岡市史』第3巻史料編1 1966）
水野正好ほか『山畑古墳群Ⅰ』（東大阪市文化財調査報告書第1冊 1973）
- ⑱ 西谷正『塚脇古墳群』（高槻市文化財調査報告書第1冊 1965）
- ⑲ 京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代－御堂ヶ池群集墳発掘調査報告－』（1971）
六勝寺研究会『御堂ヶ池群集墳第20号墳発掘調査報告』（1973）
- ⑳ 白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」（『論集終末期古墳』 1973）

畿内主要横穴式石室文献一覧

（番号は資料番号を示す）

- ① 伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則『烏土塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 1972）
- ② ①と同じ。
- ③ 河上邦彦『市尾墓山古墳』（高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1984）
- ④ ①と同じ。
- ⑤・⑥ 堀田啓一・泉森皎・河上邦彦『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ－天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第27集 1976）

掘調査報告一』（奈良県文化財調査報告書第27集 1976）

- ⑦・⑧ 上田宏範・北野耕平ほか『大和二塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第2冊 1962）
- ⑨ 小島俊次・伊達宗泰『珠城山古墳』（奈良県教育委員会 1956）
- ⑩・⑪ 伊達宗泰「大三輪町穴師珠城山2号・3号墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集 1960）
- ⑫ 北野耕平・小島俊次「北葛城郡当麻村平林古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集 1960）
- ⑬ ①と同じ。
- ⑭ 河上邦彦『平群・三里古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 1977）
- ⑮ 網干善教「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺」及び「水泥塚穴古墳」の調査」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14輯 1961）
- ⑯ 梅原末治「大和赤坂天王山古墳」（『日本古文化研究所報告』9 1938）
- ⑰ 白石太一郎・前園実知雄『馬見丘陵における古墳の調査』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 1974）
広陵町教育委員会『史跡牧野古墳現地説明会要旨 1984）
- ⑱ 河上邦彦「桜井市谷首古墳」（奈良県教育委員会『奈良県的主要古墳』Ⅰ 1971）
- ⑲ 濱田耕作『大和島庄石舞台の巨石古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第14冊 1937）
- ⑳ 伊達宗泰「桜井市栗原越塚古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集 1960）
- ㉑ 泉森皎「秋殿古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集 1982）
- ㉒ ①と同じ。
- ㉓ 網干善教・河上邦彦・奥田豊「都塚古墳発掘調査報告」（『関西大学文学部考古学年報』2 1967）
- ㉔ 岡崎晋明「文殊院東古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集 1982）
- ㉕ 河上邦彦「御所市水泥塚穴古墳」（『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第30集 1978）
- ㉖・㉗ 白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」（『論集終末期古墳』1973）
- ㉘ 梅原末治「大和越岩屋山古墳」（『日本古文化研究所報告』1 1935）
- ㉙ 泉森皎「艸墓古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集 1982）
- ㉚ 梅原末治「大和平群村西宮古墳」（『日本古文化研究所報告』1 1935）
- ㉛ 岡崎晋明「文殊院西古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集 1982）

- ③② 西谷正『藤の森・蕃上山二古墳の調査』（大阪府水道部 1965）
- ③③ 高井健司「長原七ノ坪古墳とその馬具」（『葦火』創刊号 1986）
- ③④ 森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」（『大阪府史』第一巻 1978）
- ③⑤ 藤沢一夫・谷本武『八尾市高安群集墳の調査（第2次）－昭和42年度服部川その他地区調査概要－』（大阪府教育委員会 1968）
- ③⑥ 片山長三「枚方の遺跡と遺物」（『枚方市史』第1巻 1967）
- ③⑦ 藤沢一夫・堀江門也ほか『河南町東山弥生集落発掘調査概要』（大阪府教育委員会 1970）
- ③⑧ 藤井直正・都出比呂志『枚岡市史』第3巻史料編1 1966）
- ③⑨ 小林行雄・榑崎彰一『金山古墳および大藪古墳の調査』（大阪府文化財調査報告書第2輯 1953）
- ④⑩ 梅原末治「河内五条の方形墳」（『日本古文化研究所報告』1 1935）
- ④⑪・④⑫ ③⑧と同じ。
- ④⑬ 森浩一「大阪府葉室古墳群の大方墳」（『古代学研究』58 1970）
- ④⑭ 白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜－横穴式石室受容に関する一考察－」（『先史学研究』5 1965）
- ④⑮ 上田舒ほか『富木車塚古墳』（大阪市立美術館学報2 1960）
- ④⑯ 川端真治・金関恕「摂津豊川村南塚古墳調査概報」（『史林』38－5 1955）
- ④⑰ 亥野彊『川西市史』第4巻 考古資料 1977）
- ④⑱ 梅原末治「摂津福井の海北塚古墳」（『日本古文化研究所報告』4 1937）
- ④⑲ 勇正広・藤岡弘ほか『具足塚発掘調査報告』（西宮市教育委員会 1976）
- ⑤⑩ 梅原末治「摂津鉢塚古墳の石室」（『日本古文化研究所報告』1 1935）
- ⑤⑪ 武藤誠・橋本久『宝塚市史』第4巻 考古編 1977）
- ⑤⑫ 梅原末治「摂津耳原古墳」（『日本古文化研究所報告』1 1935）
- ⑤⑬ 武庫川女子大学考古学研究会『旭塚古墳－表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証』（1984）
- ⑤⑭～⑤⑯ 京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代－御堂ヶ池群集墳発掘調査報告－』（1971）

第4表 畿内主要横穴式石室一覧表

(() 内は玄室幅で割った数値で、倍数値及びそれに近似する数値を太字とした。)

1. 大和

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
1	椿井宮山	3.0	4.1 (1.4)	1.0	0.5 (0.2)	A ¹	右片袖	円墳 径20m
2	勢野 茶臼山	2.7	4.6 (1.7)	1.3	5.4 (2.0)	A ²	右片袖	前方後円墳 全長40m
3	市尾墓山	2.6	5.87 (2.3)	1.82	3.58 (1.4)	C	右片袖	前方後円墳 全長60m
4	柿 家	3.2	5.35 (1.7)	1.3	3.7 (1.2)	A ²	左片袖	円墳 径12m
5	石上大塚	2.8	6.3 (2.3)	2.8		C	左片袖	前方後円墳 全長107m
6	ウワナリ塚	2.9	6.85 (2.4)	2.0		C	両 袖	前方後円墳 全長110m
7	大和二塚 後円部	2.98	6.73 (2.3)	1.73	9.68 (3.2)	C-3	両 袖	前方後円墳 全長60m
8	“ 前方部	1.7	3.9 (2.3)	1.4	5.1 (3.0)	C-3	右片袖	“
9	珠城山 1号墳	1.65	3.4 (2.1)	1.0		B	右片袖	前方後円墳 全長50m
10	3号墳 後円部	2.14	4.66 (2.2)	1.1	5.1 (2.4)	C	両 袖	前方後円墳 全長47.5m
11	“ 前方部	2.1	4.42 (2.1)	1.2	4.3 (2.0)	B-2	右片袖	“
12	平 林	3.0	5.5 (1.8)	2.0	6.5 (2.2)	A ²	両 袖	前方後円墳 全長55m
13	鳥 土 塚	2.8	6.0 (2.1)	1.9	8.2 (2.9)	B-3	両 袖	前方後円墳 全長60.5m
14	三 里	2.44	4.92 (2.0)	1.45	7.06 (2.9)	B-3	両 袖	前方後円墳 全長35m?
15	水 泥 南	2.25	4.55 (2.0)	1.6	6.22 (2.8)	B-3	両 袖	円墳 径14m
16	天 王 山	3.0	6.36 (2.1)	1.8	8.5 (2.8)	B-3	両 袖	方墳 一辺40m
17	牧 野	3.3	7.0 (2.1)	1.8	10.15 (3.1)	B-3	両 袖	円墳 55×48m

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
18	谷 首	2.8	6.0 (2.1)	1.7	7.8 (2.8)	B-3	両 袖	方墳 35×38m
19	石 舞 台	3.45	7.7 (2.2)	2.4	11.5 (3.3)	C	両 袖	方墳 一辺53m
20	越 塚	2.75	5.3 (1.9)	1.8	10.7 (3.9)	B-4	両 袖	円墳 径40m
21	秋 殿	2.26	4.48 (2.0)	1.6	9.2 (4.1)	B-4	両 袖	方墳 26×27m
22	ツボリ山	2.55	4.25 (1.7)	2.0	4.65 (1.8)	A ²	両 袖	円墳 径20m
23	都 塚	2.95	5.3 (1.8)	2.0	6.9 (2.3)	A ²	両 袖	方墳? 26~28m
24	文殊院東	2.67	4.69 (1.8)	2.04	8.31 (3.1)	A ²	両 袖	円墳 径15m
25	水泥塚穴	3.1	5.6 (1.8)	2.0	7.6 (2.5)	A ²	両 袖	円墳
26	小 谷	2.8	5.05 (1.8)	1.9	6.45 (2.3)	A ²	両 袖	
27	峯 塚	2.65	4.6 (1.7)	1.9	6.5 (2.5)	A ²	両 袖	円墳 径35m
28	岩 屋 山	2.7	4.72 (1.7)	1.93	12.08 (4.5)	A ²	両 袖	方墳 一辺40m
29	艸 墓	2.71	4.44 (1.6)	1.9	8.72 (3.2)	A ²	両 袖	方墳 22×28m
30	西 宮	2.1	3.6 (1.7)	1.5	9.1 (4.3)	A ²	両 袖	方墳 一辺20m
31	文殊院西	2.9	5.12 (1.8)	2.3	7.38 (2.5)	A ²	両 袖	円墳? 径30m

2. 河内

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
32	藤 の 森	1.5	3.5 (2.3)	0.9	1.0 (0.7)	C	右片袖	円墳 22m
33	長原 七ノ坪	2.5	3.8 (1.5)	1.1		A ¹	右片袖	前方後円墳 全長22m

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
3 4	芝 山	3.0	3.8 (1.3)	1.0	1.8 (0.6)	A ¹	両 袖	前方後円墳 全長26m
3 5	愛宕塚	3.08	7.16 (2.3)	2.1	9.6 (3.1)	C-3	両 袖	円墳 径25m
3 6	白雉塚	2.4	3.8 (1.6)	1.2	4.7 (2.0)	A ²	左片袖	円墳 径30m
3 7	一須賀 1号墳	3.1	6.5 (2.1)	1.2	8.5 (2.7)	B-3 ?	両 袖	円墳 径30m
3 8	松本塚	2.6	5.2 (2.0)	1.7		B	両 袖	円墳 径20m
3 9	金 山	2.48	3.8 (1.5)	1.72	6.26 (2.5)	A ¹	両 袖	双円墳 全長78m
4 0	五 条	2.5	5.0 (2.0)		7.0 (2.8)	B-3	両 袖	方墳 一辺30m
4 1	山畑 2号墳	2.6	6.44 (2.5)	1.9	10.24 (3.9)	C-4	右片袖	上円下方墳 一辺28m
4 2	二本松	2.3	4.5 (2.0)	1.9	8.2 (3.6)	B-4 ?	両 袖	円墳 径15m
4 3	葉室石塚	2.1	6.1 (2.9)	1.7	5.6 (2.7)	D-3 ?	両 袖	方墳 一辺26m

3. 和泉

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
4 4	塔 塚	2.2	2.4 (1.1)	0.9	0.5 (0.2)	A ¹	両 袖	方墳 一辺30m
4 5	富木車塚	1.3	3.7 (2.8)	0.9	3.2 (2.5)	C	右片袖	前方後円墳 全長45m

4. 摂津

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
4 6	南 塚	2.5	5.0 (2.0)	1.2		B	右片袖	前方後円墳 全長50m
4 7	勝福寺 北墳	2.32	4.7 (2.0)	1.36	4.3 (1.9)	B-2	右片袖	円墳 径10m

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
48	海北塚	2.2	4.2 (1.9)		5.7 (2.6)	B-3 ?	左片袖	円墳
49	具足塚	2.07	3.49 (1.7)	1.18	5.26 (2.5)	A ²	右片袖	円墳 径17m
50	鉢塚	3.3	6.4 (1.9)	1.5	7.5 (2.3)	B-3 ?	両袖	上円下方墳 一辺40m
51	中山寺 白鳥塚	2.5	6.0 (2.4)	2.0	9.2 (3.7)	C	両袖	
52	耳原	2.4	6.9 (2.9)	1.68	6.9 (2.9)	D-3	両袖	円墳 径20m
53	旭塚	2.17	4.03 (1.9)	2.17	6.32 (2.9)	B-3	両袖	方墳 25×28m

5. 山背

資料 番号	古 墳 名	玄 室 (m)		羨 道 (m)		企画法	形 態	墳 丘
		幅	長	幅	長			
54	天塚 後円部	1.8	4.7 (2.6)	1.25	3.0 (1.7)	C	左片袖	前方後円墳 全長73m
55	丸山	3.2	4.9 (1.5)	1.9	9.6 (3.0)	A ¹	両袖	円墳 径50m
56	御堂ヶ池 1号墳	2.5	3.7 (1.5)	1.4		A ¹	両袖	円墳 径30m
57	入道塚	2.5	4.0 (1.6)	1.6	7.2 (2.9)	A ²	両袖	円墳 ?
58	衣笠山 1号墳	2.2	3.2 (1.5)	1.4		A ¹	両袖	円墳 径26m
59	蛇塚	3.8	6.7 (1.8)	2.6	11.1 (2.9)	A ²	両袖	前方後円墳 全長75m
60	狐塚	2.3	3.8 (1.7)	1.4		A ²	両袖	円墳
61	甲塚	2.8	5.2 (1.9)	1.6	9.0 (3.2)	B-3	両袖	円墳 径38m